

「おらっ！起きねえか、太一！」

無理矢理布団を剥ぎ取られ、突如押し寄せる寒さに僕は震える。寝ぼけまなこで見あげると、鬼の形相のお母さんが仁王立ちしていた。

「いつまで寝てんだ！さっさと起きて準備しやがれ！」

「うう：寒い：もう少しだけ寝かせてよ：」

「ぬるいこと言ってんじゃねえよ！うらっ！」

「はあん！」

僕は情けない悲鳴をあげてしまう。ベッドで丸まる僕の背中を、お母さんがいきなり平手で叩いたのだ。

そしてさらに体を引っ張り、強引に起きあがらせようとする。

「ほら起きろ！起きろや、この根性なしが！」
「ああっ、わかった！わかったから！起きる、

起きるって！…もう…着替えるから出てってよ」

「ホントだろうな？二度寝なんてしたら承知しねえからな。さっさと下りてこいよ」

お母さんは出ていった。僕はため息をつく。

「…はあ」

毎朝、この調子だった。僕のお母さんは乱暴で、ガサツで、そしてとても恐い。

見た目からしていかつく、切れ長の目はいつも鋭い眼光を放ち、女性にしては筋肉のついた体は迫力充分。浅黒い肌も、なんだか攻撃的な雰囲気がある。

髪は派手な金色に染めていて、それを後ろで雑に束ねただけの味気ないポニーテール。母親らしい優雅さや、たおやかさとは、まるで無縁といえた。

なんでもお母さんは若い頃ヤンキーで、相当

悪いことをしていたらしい。殴る蹴るのケンカなんて日常茶飯事だったようだ。

そしてその荒い気性は、今も全然変わっていないように思えた…。

※※※

「よっしゃ！じゃあ二人とも気合い入れていってこいよ！」

専業主婦のお母さんは、出発する僕とお父さんを玄関で見送ってくれる。

「うん、ありがとう母さん。じゃあいつてくるよ」

「…いつてきます」

「ん？なんだ、太一。シケた面しやがって」

憂鬱な僕の表情に目敏く気づき、お母さんが
言ってきた。

「え？…いや…まあ…その…あんまり学校行
きたくないっていうか…」

「はあ？なにふざけたことぬかしてやがんだ、
てめえは！学校行くのが学生の仕事だろうが
よ！おい、わかってんのか、こら！」

お母さんは突然僕の耳を強く引っ張ってき
た。

「いたっ！痛い！痛いって！もう、やめてよお
母さん！」

「ちょ、ちよつと母さん、やりすぎだよ…。」

太一痛がつてるじゃないか…」

「てめえは黙ってろ！あたしはこいつを根性
なしのしょうもない大人にはしたくねえんだ
よ！だから今の内からこの腐った性根を叩き
直してやらねえと！おら太一、わかったか！ち

やんと文句言わず学校行くな！おいっ！」

「わかった！わかったって！ちゃんと行くから！耳ちぎれるよ！」

制止してくれるお父さんさえ振り切り、お母さんは僕への暴力を続けた。お父さんの仕事は学校の先生で、二人はその昔教師と生徒という間柄だったらしいけど、家庭の中での力関係は完全に逆転していた。

お母さんの言ってることは至極正しいのかもしれない。でも僕はその無神経さを腹立たしく思わずにはいられなかった。

こっちの気も知らないで…。

母親なのに、全然察してくれないじゃないか…。

これが、親ガチャに外れるというやつなのか。僕は今日も暗澹たる思いで、学校に向かう…。

※※※

「あ：あの：：これで：：よかったですか？」

昼休み。教室のある机の上に、僕は購買で買ってきた三人分のパンと缶コーヒーを置いた。近くに密集させた椅子に腰掛け、三人の不良がたむろしていた。

僕はこいつらにいじめられていた。毎日ではないけど、こんな風によくパシリをさせられたりしている。

「つたく、おせえよ」

「ホントだ。いつまで待たせんだよ」

「このヘボ太一が」

礼を言うこともなく、僕を罵倒する不良達。怒りがこみあげてきたけど、とにかく役目は果

たした。僕は目立たないようにその場から去ろうとする。

ところが。

「おい、待てよ太一！このコーヒー、アイスじやねえか！誰がこんな寒い季節にアイスコーヒーなんて飲むんだよ！ホットに決まってるだろうが！」

リーダー格の高橋という男が怒鳴り声をあげた。派手な金髪の、見るからに悪そうな奴だ。

「あ…」

（しまった…）

痛恨の失敗に、僕は目の前が暗くなる。

「マジそんなこともわからねえのか、このヘボ野郎！」

「ご、ごめんなさい！すぐに買い直してきます！お代は僕がだしますから！」

「んなの当たり前えだ。でもそれより、まずは

間違って買ってきたことに対する詫びが先だ
ろうが。俺達に煩わしい思いをさせたんだから、
当然だよな？」

「え…」

恐怖に震える僕に、高橋はとんでもないこと
を言ったのだった。

「そのアイスコーヒー三本…頭からかぶれ。そ
れで許してやるよ」

「なっ…」

「ぎやははは！」

「高橋やべえ」(笑)

笑いさざめく残り二人の不良…。

「おら、とつととやれや。早くしねえと昼休み
終わっちゃうじゃねえか」

凄味を利かせて、高橋は僕を追い詰めてくる。
僕は泣きそうになる。

その時。

いきなり目の前に伸びてきた手が、机に置かれた缶コーヒーを取ったのだった。その人物はもう一方の手でプルトップを開けると、なんら滞りない動作でそれを自らの頭上に持っており、そのまま逆さにした…。

当然容赦なく頭にぶちまけられる缶の冷たい中身。けれど顔面を伝い体まで垂れ落ちてきても、空になるまでじっとしている…。呆氣に取られる僕達の前で、彼は残り二本の缶コーヒーも同じようにした。自分で頭からかぶったのだ。

そして高橋を見て言った。

どこか不気味な笑みを浮かべて…。

「これでいいのかい、高橋くん？」

「…ちっ、服部かよ。もういいよ、あっち行けよお前ら。…キモいんだよ」

服部くんは僕を振り返った。

「行っているそうだよ、太一くん。ほら、行く？」

「う、うん…」

僕は戸惑いながら彼のあとについていった…。

※※※

誰もいない校舎裏の一画で、僕達は向かい合っていた。

「ごめん！ホントにごめんよ、服部くん！」

冷たいアイスコーヒーまみれになった彼の頭から顔、制服もハンカチで懸命に拭きながら、僕は平謝りに謝った。本当に申し訳なかった。だけど服部くんはいつも通り飄々としてい

て、

「全然いいよ、気にしないで。こんなの初めてだから良い経験になったよ。…冬場に頭からアイスコーヒーかぶるなんてさ(笑)。意外に気持ち良いもんだよ、ははは。ああ、拭いてくれてありがとうね、太一くん。もう大丈夫だよ」

平然とそう言っただけだった。促され、僕は体を離す。彼は続ける。

「それより僕の方こそごめんよ。パシリさせられてたこと、気づいてあげられなくて。ちよつとトイレでうんこしてたんだよ…。でもいつも言ってることだけど、なんかされそうになったらすぐ僕に言ってくれたらいいんだよ。一人で抱え込もうとしないでさ」

「…服部くん」

彼の優しさに、僕は涙が出そうになる。

「ごめん…。いつも君に頼ってばかりじゃ悪い

から：今日はなんとか一人で解決しようと思
ったんだけど：かえって迷惑かけることにな
っちゃって：」

服部くん。

僕の大親友。いや、唯一の友達といってもよ
かった。

引っ込み思案で、クラスにまるで馴染めなか
った僕。不良達に目をつけられるのも、自然の
成り行きかもしれなかった。そんな僕を助けて
くれたのが服部くんだった。彼は身を挺してい
じめから僕を守ってくれた。以来、ことあるご
とに駆けつけ、こんな風に力になってくれてい
る。たくさん励ましてもくれる。

前髪を綺麗に揃えた特徴的な黒髪マツシュ
ルームヘアーで、性格も掴みどころのないぶっ
ちやけちよつと変な奴だけど、僕は好きだっ
た。彼がいてくれるから、憂鬱で仕方ない学校

生活も、なんとか乗り越えることが出来るのだ。

：お母さんは、そんなこと知りもしないだろうけど。

「：面目ないよ。本当に助けてもらってばかりで：あ、そうだ。服部くん、今日僕の家に来ないかい？」

その時ふと思いついたことを、僕は即座に口にしていた。

「へ？太一くんの家にかい？」

「うん、お礼したいんだ。是非来てくれよ」

「そんな：今日のことなら大丈夫だよ？僕ホントになんとも思っていないからさ」

「いやいや。今日だけじゃなくて、君にはいつも世話になってるじゃないか。だからその感謝も込めて、僕の家を招待したいんだ。いいだろう？ね？」

「うーん：まあ太一くんがそこまで言うなら

「…お邪魔しようかな」

「やった！じゃあ放課後直接二人で僕の家に行こう！」

「うん、わかったよ」

なんか突発的に決まっていたけど、僕は友達が家に来ることがとても嬉しかった。

「…あ。ご飯まだだった。そろそろ昼休みやばいんじゃない？僕今日は学食で食べようと思っただけだ」

「じゃあ先行って待ってて。僕お弁当教室に置いたままだから、急いで取りに行ってくるよ」
「うん。…そういや太一くんはいつもお弁当だね。…お母さんが作ってくれるのかい？」

「そうだよ。…実は僕のお母さん元ヤンキーでめっちゃ恐いんだけどさあ、何故か料理だけは上手いんだよね」

「…へー…そうなんだ」

「うん」

「……そうなんだ」

「？」

※※※

「ただいま」

僕は服部くんを連れて帰宅した。こんなこと初めてだったので、心がとても弾んでいた。専業主婦で昼間も家にいるお母さんが、玄関まで迎えに出てくる。

「おかえり、太一。…あれ？」

そして僕の隣に立つ服部くんを見て、露骨に目を丸くする。

「こちら服部くん。僕の友達…っていうか大親

友だよ」

「どうも…こんにちは」

「太一、お前友達いたのかよ！」

大袈裟に驚くお母さん。…失礼な母親だ。

でもすぐに礼儀正しい態度になり、

「…いらっしゃい、服部くん。太一と仲良くしてやってくれよな。こいつ根性なしだから迷惑かけるかもしれないけど、どうか頼むな」

そう言ったのだった。少し嬉しそうだった。

「はい。勿論です」

「じゃあ僕達部屋に行くから、お母さん邪魔しないでね」

僕はお母さんに釘を刺すように言った。普段なら怒られかねない言動だったけど、お母さんは空気を読んだのか、

「…わかったよ」

小さく答えたただけだった。今日は大人しくし

ていてくれるらしい。

服部くんと二人で、二階の僕の部屋に向かう。

「服部くん。これ、僕が集めたゲームとか漫画。」

君にあげるよ」

部屋の絨毯にゲームソフトと漫画本を所狭しと並べた僕は、彼に言った。

「えっ！そ、そんな…悪いよ…」

「いいから、いいから。いつものお礼だよ。…君、全然買ってもらえないって言ってたじゃないか。これはもういらなくなったやつだからさ。本当に全部あげるよ。どうぞ持っていてくれ」

「いやいや、そんな訳にはいかないよ…」

「ホントにいいって。…君にはこんなものでは代えられないくらい助けてもらってるんだから、僕は。本当に感謝してるんだ。…その気持ちを、受け取ってほしい」

「…太一くん。…ありがとう。でもさすがに全

部もらうのは申し訳ないからさ、この中からいくつか選ばせてもらってもいいかい？」

「わかったよ。じゃあその間に僕ちよっとお菓子でも用意してくるね。ゆっくり選んでよ」

「うん、ありがとう」

僕は部屋を出て、一階の台所に向かった。そして戸棚から出したお菓子をお盆いっぱいに載せる。コップにジュースも注ぐ。

近くにいたお母さんが言ってくる。

「おい、太一。そんなに食うのか？わかってんのか、それ明日以降の分も入ってんだぞ？お前しばらくおやつなしになるぞ？」

「いいんだよ！全部服部くんにあげるんだ！」

「ふふっ：良い友達が出来たみてえだな：まあ仲良く遊ぶのはいいけど、風呂洗いは忘れんなよ」

「わかってるよ、もう…」

僕はお母さんに背を向けて歩きだしながら毒づく。

（お前専業主婦だろ！自分で洗えよ！）

勿論口に出したら殺されるので、心の中で…。

「おまたせ、服部くん。お菓子だよ。さあ好きなだけ食べてくれ」

「ええっ！そ、そんなに…。…本当にありがとうね…太一くん」

僕達は部屋の絨毯に腰を下ろし、二人でお菓子を食べた。服部くんはゲームソフト一本と漫画本二冊を選んでいた。もっといっぱい貰ってくれて全然いいのに、控え目で、やっぱりすごく良い奴だ。

でも僕の気も済まないのも、

「服部くん、他になにか欲しいものはないかい？もうこの際だから、僕が持ってるもの、なんでも君にあげるよ」

そう言っていた。

「え：そ：それは：本当かい：太一くん？：
本当に：なんでもくれるのかい？」

服部くんは遠慮がちな上目遣いで僕を見ていた。なるほど、と思った。きつと初めから、彼の前には出さなかった最新ゲームソフトや、本棚に並んでいるヒーローフィギュアなんか欲しかったのだろう。僕はそれでも構わなかった。彼のためなら、喜んでもうなんでも差しだすつもりだった。

「ああ。遠慮なくなんでも言ってくれよ」

「うん：実は僕：太一くんが持っているものの中に：すごくすごく：欲しいものがあるんだ：」

やっぱりだ。

「なんだい、それは？ゲーム？漫画？それともフィギュアかい？」

服部くんは言った。

「君の……お母さん」

「へ？」

言葉の意味がわからなかった。

彼は続けた。

「僕……君のお母さんを……調教して飼育した
い♪」

人生で初めて出来た大親友は、僕の目をじつ
と見つめ、不気味すぎる笑みを浮かべていた……。

激コワ元ヤンキーお母さんを
大親友に堕としてもらって
調教・飼育してもらおう話

047

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

登場人物

吉木 太一（よしき たいち）

引っ込み思案で大人しい少年。恐いお母さんに辟易している。

吉木 桃子（よしき ももこ）

太一の母。四十歳。元ヤンキーでとても乱暴な性格。派手な長い金髪を後ろで束ねただけの雑な髪型。

服部くん（はっとりくん）

太一の大親友。いじめられる太一を度々助けてくれる。前髪を綺麗に揃えた黒髪マッシュルームヘアー。掴みどころのない不思議な性格。

吉木 実（よしき　みのる）

太一の父。桃子の夫。教師。生徒だ
った桃子と結婚した。

高橋 竜治（たかはし　りゅうじ）

不良。太一をいじめる嫌な奴。

高橋 和沙（たかはし　かずさ）

??????

「え…え…」

訳がわからず戸惑う僕に、服部くんは慌てた感じで言葉を繋ぐ。

「ごめん、ごめん。いきなり変なこと言っ
て。驚いただろ？でも嘘じゃないんだよ。僕が欲
しいのは、本当に君のお母さんなんだ」

「はあ…」

「太一くん…君は…エッチなことに興味は
あるかい？」

「え…いや…あんまり…ないけど…」

僕は正直に答えた。

「そうかい…太一くん…君は僕に本当に良く
してくれるから、もう隠さずに言うけど…実は
僕は…エッチなことが大好きで…とてもスケ
ベで…すごく良くない人間なんだよ…今まで
黙っていて、ごめんよ…」

「……………」

服部くんの突然の告白に、僕は言葉を失ってしまう。彼は伏し目がちになり、ひどく申し訳なさそうにしていた。でも僕は、決して嫌な気はしなかった。むしろ服部くんが僕を大親友と見込んで秘密を打ち明けてくれている感じがしたので、とにかく真剣に話を聞こうと思った。彼は続ける。

「それで……ちょっと引かれるかもしれないんだけど……実際に人妻や人のお母さんなんかを……調教して……飼育してるんだよ、僕……」

「……調教……飼育……」

僕はオウム返しに呟いていた。先程も耳にしたそれらの言葉をエッチな意味で捉え直すと、ぼんやりとだけど確かに理解が浮かびあがってくる。

でもそれは、とても具体的に実感出来るよう

な代物ではなかった。第一そんなの、僕達よりずっと大人の世界の話なんじゃないのか…。

そんな僕の疑問に答えるように、彼は言う。

「…勿論信じられないよね…じゃあとりあえず見てくれるかい？…僕のいう調教や飼育が、一体どういうものなのか…」

服部くんはスマホを取りだし、それを操作しだした。僕はなんだかドキドキしてきていた。

軽快に指を動かし、スマホの中にあるなにかを探しながら、彼は僕に言った。

「…今日君にパシリさせてた、あの不良の高橋くんいるだろ？」

「うん」

思い出したくもない嫌な奴だ。服部くんは続けて言った。なんでもない調子で。

「彼のお母さん、実は僕が飼育している犬なんだ」

「え…」

一瞬、全身が凍えるほどに冷たくなる…。

「あ、あった。これだ。この動画見てよ、太一くん」

服部くんはスマホを僕に向けた。言われるがまま覗き込む。それはこのスマホで撮影されたらしい縦長の動画で、直立する女性の全身が真正面から画面いっぱいに映されているだけのものだった。

三十代後半から四十代前半くらいの、とても綺麗な人だった。明るい茶色に染められた長い髪がパーマで緩やかにカールしていて、服装は清楚な白のブラウスとシックなグレーのロングスカート。オシャレで、全体的に洗練された印象を受ける。場所は一般家庭のリビングのようだ…。

『じゃあ質問するね。名前と、それから職業は

なんですか？教えてください』

動画から、姿の見えない服部くんの声がした。彼がスマホを持って撮影しているのだろう。

『名前は…高橋和沙です。職業は専業主婦で…毎日家事を頑張っています』

『趣味と特技もお願いします』

『趣味はショッピングです…。特技は…編み物ですね』

「これ、高橋くんのお母さんね。あの野蛮な不良とは似ても似つかないだろう？」

「うん…」

服部くんはスマホに見入る僕に注釈を入れてくれる。

「参観日の時にこっそりナンパしてね。結構呆気なく連絡先教えてくれたんだよ。すぐ近くに息子いたのに…。こんな清楚そうに見えるのね」

「……………」

僕は面識なかったけど、彼が言うのだからそうなのだろう。

この女性は、高橋のお母さんなのだ…。

「…ゴクッ」

『じゃあ次の質問。あなたにとって…息子ってなんですか？…一言でいうなら』

『息子ですか？…一言で…うーん…それは…
…宝物…ですかね？』

『わかりました。じゃあ次。…これまでのあなたの人生の中で、一番尊い出来事ってなんですか？』

『それは勿論、息子に出会えたことですね…やっぱり…』

「……………」

服部くんの問いに、カメラ目線で淡々と答えていく高橋のお母さん。ややクサイ質問ではあ

ったけど、なんの変哲もない映像といえた。
だけど僕は、とても不穏な違和感を覚えずに
はいられなかった。大体、息子のクラスメイト
にこういうよくわからない動画を撮らせてい
ること自体、普通ではないのだ。

…そして僕のその違和感は気のせいではな
かったと、無惨なまでに証明される。

画面が変化して、一瞬でパッと映像が切り替
わったのだ。

「なっ！！！」

僕は思わず間拔けな声をあげてしまう。新し
く描きだされた映像も、直立する高橋のお母さ
んを真正面から画面いっぱいに映したものだ
った。撮られる角度も彼女の姿勢もなんら変わ
っていない。ほとんどさっきのままだ。

ただ一つだけ、明確に違うことがあった。

…彼女は、服を着ていなかった。

一糸纏わぬ素っ裸になり、どういうわけか長い鎖のついた真っ赤な首輪だけを、首に装着していた。

そしてそれなのに、全く隠すことなく柔らかそうな白い肌を堂々と晒していた。恥ずかしがっている様子も見えない。

「ああ…なあ…」

僕の口から漏れる呻き…。あまりの衝撃に、もはや僕は恐怖に駆られていた。

一体これは、なんなのか…。

大きな二つのおっぱいも、ピンクの乳首も、かなり濃い陰毛も丸出しにして立つ、スマホの中のクラスメイトのお母さん…。そんな彼女を嬉しそうに眺めて、服部くんは言う。

「あはは。すごく良い体だと思わないかい？僕大好きなんだ、この犬の体」

「い…犬…」

さつきも聞いたその言い草に、僕はギョツとする。

動画の中に動きがある。

『あの…すみません…さつきの質問の答え…私…ちよつと嘘ついてしまって…ごめんなさい…今度はちゃんと正直にお答えしますの…お手数ですがもう一度質問してもらってもよろしいでしょうか?』

裸になっているというのに、至ってなんでもないような様子で話す高橋のお母さん…。

『いいよ、全然。じゃあもう一度最初から質問するね。名前と職業を教えてください』

改めてなされた服部くんのその質問に、不良高橋のお母さんは答えた…。

『名前は…高橋☆チンポ大好き☆和沙…です。…これが正式な本名になります。さつきは省略してしまつてすみません。「チンポ大好き」と

☆マークも含めて正しい私の名前です』

「!!!!!!」

『それで職業は…息子のクラスメイトの服部様の犬をやっています…それが私の職業…私の仕事です…私…家族に内緒で…日夜浮気チンポしゃぶりや、浮気セックスを頑張っています♪』

「!!!!!!」

『趣味と特技もお願いします』

『趣味は勿論セックスです♪特技は…騎乗位ですね♪』

「!!!!!!」

ショッキングすぎて、一瞬本当に呼吸が出来なかった。見るからに上品そうでとても綺麗なこの女性は、変わらぬ淡々とした口調でなんてことを言っているのだろう。

…高橋の、お母さんだというのに。